寄せ屋大竹屋さんの孤独な死

釜食堂手伝い　高吉　敬一

大竹屋さんは自称四国で産れた。髪はロングヘヤーでヒゲは伸びほうだいだった。いわば四十九歳の路上生活者。現代風にいえばヒッピーだった。僕は二年間のヒモの総決算としてサンフランシスコに四ケ月いたけれど、大竹屋さんの様に泊の勢いを借りてでもセイゼツな死を死らない。

大竹屋さんを四六時中動かしていたものは、ヤンカラへ焼酒一だった。

生前の大竹屋さんをしてログセにいわしていたのは、「兄さん、あと二、三日は頑張ってみます。」だった。

大竹屋さん、あなたの葬式に身内は出席くなかった。僕は三十一歳、まだ死にはほど遠いが、いずれあなたと同じ様に死をいつかは迎える。死は冷酷なほど平等だ。金持であろうが貧乏であろうが善悪の区別なくに襲ってくる。元ポリ公だった大竹屋さん。僕はあなたの精神病院の独居房での死に対して無力だった。僕の父はマルクスでもレーニンでもない僕の父は、あなたと同じ様に市民生活からドロップ・アウトせずにはいられなかった侍くしい視線をしたはみだしものだ。

僕はまだ釜日労にきて一ケ月足らずの新参者だ。釜日労の委員長はヒッピーには興味がないという。けれど十七歳の家出人の僕の子守唄はJAZZのスイングでありブルースだった。アメリカ合衆国の人種差別をここでは口にすまい。僕はそれでなくと

もこの祖国で苦しい一労働者の死を目撃して、線香をあげる位の無力な人間だから。

大竹屋さん、憶えているかい、ダンボールをさばいたわずかな持ち金で僕にヤンカラをおごってくれたあなたの死の数日前の出来事を。僕はどの女との情事よりも明確におぼえている。かって僕が殺人未遂で東京の精神病院にぶち込まれた時、やはり仲間の一人が無責任な看護人の注射によって殺された。

大竹屋さん、あなたの死は、弱者の孤独な寂しい死ということで多くの無名の戦士達の死と同一線上にならぶ。

あなたの死にもかかわらず、僕は今日、梅田の"パンピ"という丁A又又喫茶に金三百円也を払ってコルトレーンを聴きにいった。店内は幸福そうな男女のカップルでいっぱいだった。青カンという路上睡眠者の存在はここでは別の国の出来事だった。

大竹屋さん、アメリカという国で一九三〇年代にはビートと呼ばれる反逆者達の群が必然に出、プチブルの男女に少なからぬ影響を与えた。"オンザロード"日本名"路上"のビート作家、ジャックケラワックは大陸の無銭旅行の記録をうちたてて、アルコール中毒におちいった。尊敬するビート詩人、アレンギンズバーグは仏教に逃げこんだ。

お経を何千回唱題した所でパンの一切れも食卓上に並らべることは出来んのだ。

僕が食物を得るには僕の自由時間の拘束という労働という行為によって初めてなにがしかの金を得る、労働とはしんどい事なのだ。

大竹屋さん、あなたは一般労働者とはかけ離れた所で生活した。ヤクザにおびえ、ポリ公に虐待され、それでもあなたは四十九歳の寿命をまっとうした。あなたは立派

に生きぬいたのだ。刑事たちの非難の中であなたの葬式は遂行された。僕はフーテンを誇りにおもっているから葬式や花束はいらん。ちょう電の一通もいらん。かって僕の友達がフーテンの死の最大の栄誉は野垂れ死にだといい切った。大竹屋さんあなたはブーツヒルという言葉を知っているかい。流れ者の最終到達地だ。流れ者は亡骸をはいたまま死んでゆくのだ。あなたの死骸は福祉という名のなま殺しの行政によって自動的に無名墓地に運ばれた。あなたは銃を持つことをしなかった。斗いの言葉を発しなかった。

あらゆる路上生活者は僕の父だ。

彼等の沈黙の死の行為によって、子たる僕は闘かい方を覚える。街は戦場だ。

ある時は女をひっかけて身体のつかれをとり、食をとる。僕にひっかけられた女達、僕だって君の純心な心を踏みにじたしはなかった。けれど生きて行くには君の助けが必要だった。フーテンに組織はない。それが最大の弱点だ。権力と闘うためには人民の組織が必要だ。だが何の旗があるというのか、あるのは自業じとくというつばを吐きかけるような格言しか見当たらぬ。やはりフィリングエイジには寺山のいう様に旗はないのか。

ここ日では、いや世界では今だに自由はない。自由は必然的に恐怖を伴う。全的な開放は人間供には重すぎるのか。大竹屋さん、あなたはセコハンのウバ車を押しながらヤンカラと供にとんでいった。あなたには精神医も結核医も必要ではなかった人だ。あなたには一時のやすらぎが必要だった。心よい酔いが必要だった。

大竹屋さん、僕は酔いどれのあなたに一篇の詩を捧げる、いいかい大竹さん。

"路上生活者の歌"

早く楽にあのせに生きたいと仲間の一人がつぶやく。
俺はそれを無視して酒を飲む。
死んじまえばそれまでだ。
坊主達は輪廻転生を説く
それ等ゴミんな食物を与えるための口実だ。
俺達は学歴もなければ職もない路上生活者
今日一日が楽しければいい
なぜなら一生は一日の連続だから
けれど自由になるためには金がいる
阿呆くさい制度だ
阿呆くさい政治だ
だけど銃をもつ勇気はない。
頭ばっかり勝負はいやだ
だから俺は酒を飲む
だらくした俺
希望のない生活
ああ 酒だ。

大竹屋さん、僕のフーテンの父。
僕には部屋がないから、あなたの病んで

る身体を休ませてあげることも出来なかった。ただ救急車を呼ぶことしか出来なかった。あなたの写真が食堂にある。あなたは笑ってる。なんと笑いは二ヒルな事か、あなたは笑いで自分すらも投げとばした、自分自身を捨てなきゃいけない革命はなんとしんどいことか。

ポリ公を笑え、裁判官の石頭を笑え、僕の無力を笑え、僕も笑う、笑いの連帯だ、ケッケッケ。僕がポリ公を殺す時は笑いながら殺す。

大竹屋さん、あなたを殺したのは巨大な権力だ、酒飲みだというだけで結核患者のあなたを無慈悲にあなたを病院から追いだした病院だ。今日も救急車はベットのない病院に仲間達を形式的に運ぶ。サラリーマンは戦場では無力だ、サラリーマンの組合が無力なのはその為だ。

僕はかって天使の羽根を持ったオートバ

イ乗りだった。オートバイ乗り達はみんな奇麗いという羽根を持つんだ。でなければ時速200キロという高速ではぶっちんじまうからだ。

僕はあなたの遺骨を僕の故郷・日本海の荒波に投げたい。あなたの様な自由を求める者にあっては海はあいかわらずの永遠の女神のほほえみをたたえてくれるから。

金の路上ではオマワリ達の泥靴に無ざんに踏みつぶされてしまうから、僕はあなたの遺骨を海にばらまきたい、繰り返していう、僕とあなたは同じ血統の出だ。

僕の実父は日共を除名され、アル中になり、公団住宅でささやかな家庭を持ち隠居した。だから僕はカンドウという栄光を身にうけたのだ。ああ、鬼ツチ達の旗、僕達は父親の仇をうつために、親を殺すという業をしよいこんだのだ。なにを悲劇はギリシヤに発生したのではない。人間の営みは真剣であればあるほど悲劇の方位をさしめし、傍観者達には滑けいにみえるものだ。

僕はあなたのさいだんに真赤なバラを供えたい。だけど僕は金をもたん。

僕もまた悲しみの為に酒を飲むからだ。

オーム・かって僕が住んでいた部落のコミューンの仲間達よ、新宿の街頭詩人の群よ、仲間がひとり殺された。悲しまんでくれ、笑って彼の死体に酒をぶっかけてくれ、人間は最も愛するものに裏切られるのがせっ理だから。

夏祭り国際的に　オハ回金ケ崎夏祭りの最終日、デンマーク人らセ・ハ人が三角公園に登場・タイコとトランペットにのった足長おじさんは大受け。赤と黒に色分けされた旗を先頭にしての退場に、数百人の女仏者がなごりをおしんで「ぶるさとの歌」まで合唱した。